

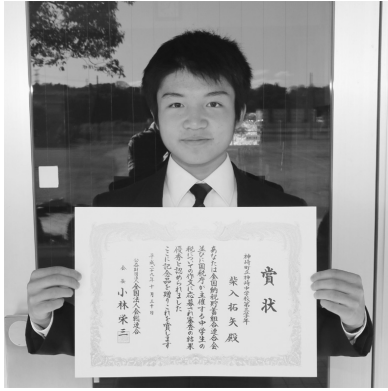
税についての作文

神崎中3年

柴入 拓矢くん

公益財団法人全国法人会総連合会会長賞受賞

全国納税貯蓄組合連合会並びに国税庁が主催した中学生の「税についての作文」。本町から作文を応募した神崎中学校3年の柴入拓矢くんが、見事、公益財団法人全国法人会総連合会会長賞を受賞しました。また、玉村優佳さんの作文が神崎町長賞、橋本実季さんの作文が香取地区教育委員会連絡協議会会長賞を受賞しました。公益財団法人全国法人会総連合会会長賞を受賞しました柴入拓矢くんの作文を紹介します。



柴入 拓矢くん

奈良時代の人々へ

「青丹よし 奈良の都は さく花の にほうがごとく 今さかりなり」

この短歌は、七一〇年に完成した平城京の美しさを詠んだものである。日本で本格的な税のしくみできたのは、奈良時代の頃である。その当時の想像図を見てみると、青の屋根瓦と朱塗りの柱が華やかな平城京と貴族の暮らしとは対照的に、貧しい格好をして税を運んでいる人々の姿が描かれていた。

今の時代、税金は誰のために使われているのだろうか。朝、目が覚めてすぐに顔を洗いに行く。蛇口を回せば出てくる水。この水は、税金によって私たちの家まで届けられているのだ。

学校へ行く途中にも税金によって作られている場所はいたるところある。ドアを開けてすぐ目に入る道路。車と歩行者が安全に通行できるように作られた信号や横断歩道も税金によって作られているものだ。また、学習に必要な教科書、さらには学校そのものもそう

である。身近な暮らしも税金によって支えられているものはたくさんある。暮らしの安全を守る警察官。火事の際に火を消してくれる消防士。町の図書館は私自身もよく利用している。

集中して勉強することができる環境が整っているうえ、気軽に利用できるのも、とても便利だ。また、私の町では、医療費が中学生まで二〇〇円である。怪我や病気が多い私たちにとって、うれしいことだ。

二〇一一年三月十一日におきた東日本大震災では、甚大な被害にみまわれた。私の住む神崎町も例外ではなかった。町の一部の地域では、液化化現象により家が傾き、住むことができなくなってしまった人もいた。そんな人々のために、小学校の体育館に避難所が設けられ、食料や毛布が無償で配られていた。

液化化した道路の舗装など、人々への援助の資金の多くは税金によってまかなわれているのだ。現代では、税金は一部の人々のためだけではなく、私たち住民が安心して、そして豊かな生活が送れるように使われているのだ。

税の歴史を振り返ると、税は貴族や武士などの一部の人々のために使われていたが、明治時代に入り、ようやく税金がすべての人々のために使われるようになった。学校ができたのも明治時代に入ってからのことだ。しかし、戦争が起こり、税金が戦争に使われてしまふこともあった。つまり、奈良時代から約一三〇〇年かけて、税金は本当の意味での使われ方になったといえる。

このように、税金は、私たちの暮らしになくてはならないものになっている。今は消費税しか納めていないが、自分が働けるようになったら、税金をしっかりと納めようと思う。

そして、奈良時代の人々にこう伝えたい。
「暮らし良い 平成の世は 人々の 税の力で 今さかりなり」